

目的 現代においては、古めかしい占いや迷信として片付けられることが多く、これまで住居学や家政学の分野で、古い文献の紹介、分析がなされることの少なかった家相をとりあげ、江戸時代中、後期の家相の文献を通して当時の住まいの捉え方を探り、家相の位置づけについて考察する。

方法 東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の江戸時代の住まいに関する文献のうち、

「家相図解」上・下 松浦東鶏(久信)著 寛政10年(1799)刊

「相宅小鑑」上・下 苗村三鼓口述、奥田庸徳編 享和2年(1802)刊

「家相秘伝集」上・下 松浦琴鶴著 天保11年(1841)刊

以上3冊を読み、文化財指定物件である2府22県38軒の江戸から明治にかけての住宅の家相図例と合せて分析、考察を試みる。更に一設計事務所の住宅設計の事例約300例を調査することにより現代における家相の捉え方を探る。

結果 住まいについて書かれた江戸時代中、後期の文献の中でも、家相の文献にはより具体的な住まいのあり方についての提言が多く見られる。多少神がかった大袈裟な言回しや戒めという手法を用いてはいるが、その内容は宅地の選び方、家屋門戸の建て方、間取りの考え方、水回りや住宅の外構等々微細に入り、庶民の住意識を高揚する効果も十分にあったと思われる。即ち家相の文献は当時の住居学のテキストのひとつと位置づけることができる。続く第2、第3報ではその具体的な内容を紹介、分析し、併せて江戸から現代に至るまでの住まいの捉え方について考察する。